

裁きと赦し——絶対者と自己の関係をめぐって (要旨)

白井 雅人

本発表では、西田幾多郎の哲学において「靈性」という語がどのような意味をもっているのか、靈性を自覚して生きることがどのようなことであるのかを解明することを目指す。西田が靈性について語る箇所を引用してみよう。

私の行為的直観と云ふのは、何處までも意識的自己を越えた自己の立場から物を見ることである。我々の自己の根底には、何處までも意識的自己を越えたものがあるのである。これは我々の自己の自覺的事實である。自己自身の自覺の事實について、深く反省する人は、何人も此に氣附かなければならない。鈴木大拙は之を靈性と云ふ(日本的靈性)。(旧版全集 11 卷 417 頁)

宗教的信仰とは、客觀的事實でなければならぬ、我々の自己に絶対的事實でなければならぬ、大拙の所謂靈性の事實であるのである。(旧版全集 11 卷 418 頁)

ここに西田の「靈性」理解の特徴が表れている。第一に、「自覺の事實」として「靈性」が考えられているということ。この自覺の事實の内容は、「意識的自己を越えたものがある」ということである。第二に、この意識的自己を越えたものを自覺するということは、宗教的信仰と結びつくということである。ただし、この信仰は「主觀的」なものではなく、「客觀的事實」とされる。このような西田の靈性について議論を理解するためには、「自覺」と「客觀」という言葉の意味を明らかにする必要があるだろう。

また、西田は、自覺的自己について、以下のように特徴づけている。

我々の自覺的自己は單に主語的有として、即ち單に空間面的自己限定として、本能的なのでもない。又單に述語的有として、即ち單に時間面的自己限定として、理性的なのでもない。主語的・述語的に、述語的・主話的に、個物的限定即一般的限定、一般的限定即個物的限定的に、時間空間の矛盾的自己同一に、作られたものから作るものへと歴史的形成的に、意志存在であるのである。我々自己は何處までも唯一的個的に、意志的自己として、逆對應的に、外に何處までも我々の自己を越えて我々の自己に對する絶対者に對すると共に、内にも亦逆對應的に、何處までも我々の自己を越えて我々の自己に對する絶対者に對するのである。(旧版全集 11 卷 434 頁)

ここから読み取れることは、自覺的自己は、自己の内と外の両面から絶対者に対してということである。さらに西田は、外に對する絶対者を裁く神と特徴づけ、内に対する絶対者を愛によって包む神と特徴づける。ただし、「共に」と言われているように、外からの絶対者の命令と、内から包む神の愛は、一つの自覺の事實を形成している。そのため、逆對應的に對する神とは、裁く神であると同時に、赦す神である、ということになる。このような「裁き」と「赦し」の問題を解明することが、靈性的自覺を生きることの意味を明らかにすることに繋がることになるだろう。